

飛躍する北海道農業

北海道米の 販売戦略の充実

第8回



酪農学園大学農業経済学科
教授 相原 晴伴

北海道の 水稲作況は 九一で「不良」

二〇〇九年産米の作況指数（九月十五日現在）は、北海道で「九一」と「不良」となった。全国的にも「九八」の「やや不良」だが、北海道が全国で最も低い結果となった。要因は、七月中・下旬に低温が続いたため不稔が発生し、その後の登熟も十分でなかったことである。JAグループ北海道と北海道NO SAIなど農業関係団体は、冷湿害対策本部を設置し、被害農家に必要な対策などを行うことになった。

心配されるのは、北海道米の需要に十分に対応した供給が難しくなることである。特に、今年度から本格的に発売されている新品種「ゆめぴりか」は、品薄の状況となっている。収穫量が少なかつたことに加えて、一

定の品質基準を満たしたものを、**「ゆめぴりか」**として販売しているからである。スーパーの米売り場に並べられた**「ゆめぴりか」**は、すぐに売り切れてしまうという状況である。

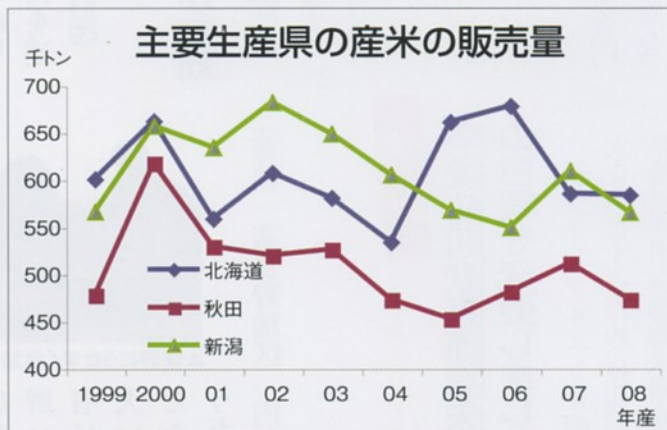
産地と実需者との 結び付きの強化

二〇〇八年産の北海道米の販売は、他県と比べて好調であった。北海道米の販売量は、〇五、〇六年産では新潟米を抜いて日本一だったが、〇七年産では大きく減少し、新潟県に抜かれてしまった。〇八年産では新潟県や秋田県の需要量が減少する中で、北海道米は前年の数量を維持したために、再び日本一となった。

北海道米に対する高い評価の要因は、農家、農協、ホクレン、そして行政などが一体となって、良食味米の出荷体制を整備したことである。北海道米の需要は、

外食産業などでの業務用米としても、スーパーなどで販売される家庭用米としても、大きく伸びた。主要三品種である「きらら397」、「ほしのゆめ」、「なつぼし」が、それぞれの特徴を活かした用途で販売された。また、「おぼろづき」、「ふっくらんこ」といった「高級ブランド米」も人気が高い。

北海道米の強みとして、ホク



資料：農林水産省「米穀の需要及び価格の安定に関する基本指針」。

注：例えば2008年産は、2008年7月から2009年6月までの産米の需要量を示し、各年産の販売量とは厳密には一致しない。

レンによる全道共販のなかで、農協と実需者との結びつきが強いことがあげられる。ホクレンによる品位別の集出荷制度の導入によって、実需者の求める米を出荷できる体制が整えられた。実需者との結び付きを得ることができた農協は、技術指導の強化や大型集出荷施設の活用などによって、販売先の要望に合わせて米の品質や食味を確保するよう努力している。さらに近年では、播種前契約など、早い時期に契約を推進することが行われている。

地域で異なる 水田農業の展開方向

北海道における市町村別の生産目標数量は、北海道米対策本部が設定した「ガイドライン」によって決められている。これは、市町村を評価基準によっていくつかのグループに区分し、上位のグループに、目標数量を

多く配分するというものである。評価基準は、高整粒比率、低たんぱく米比率、産地指定比率などである。

こうした仕組みの下で、水稻作付動向や水田農業の展開方向が、地域によって大きく異なってきた。いわゆる良食味米産地では水稻作付面積が増加しているのに対して、準良食味米産地では減少している。上川中部、北空知、中空知では増加傾向にあるが、南空知中央、南々空知では減少している。

また近年、販売戦略に応じて、地域・農協ごとに品種構成の特徴が明確になっている。かつては、どの地域でも「きらら397」に偏った作付けが行われていた。今でも、北空知、中空知では、「きらら397」の比率が高い。南空知では、「ななつぼし」の比率が比較的高く、「おぼろづき」、「大地の星」も一定程度、作付けされている。上川中央部では、「ほしのゆめ」の

作付比率が他地域よりも高い。道南では、「きらら397」が中心であるが、「ふっくりんこ」の比率も高い。

米生産の展開 方向の明確化を

「米政策改革」の下で、各産地は「地域水田農業ビジョン」を作成したが、いま、米生産の展開方向を明確にすることが、改めて重要となっている。

第一に、地域における水稻作付の位置づけを明確にすることである。前述のように、南空知中央や南々空知では水稻作付面積が減少しているが、米の販売力の面から、どの程度の水稻作付面積が望ましいかを、明確にしておくべきであろう。その上で、水田地帯として、水稻、麦、大豆、さらには野菜・花を含めて、総合的にどのような産地形成をするかの方向性を、改めて示すことが必要である。

第二に、米の品質を維持し、

保証するための取り組みが重要である。スーパーなどで店頭販売されている「ゆめぴりか」の精米パッケージには、オリジナールなマークが表示されている。これは、生産者を中心に北海道・JAなどで構成される「北海道米の新たなブランド形成協議会」が認定した「ゆめぴりか」を使用していることを証明するものである。このように、これからは産地として精米の品質を保証することが重要となる。

最後に、今年のような不作の年こそ、農協やホクレンにとつて、これまでの販売戦略を点検するとともに、一層の販売力の強化が求められる。

●執筆者プロフィール

相原 晴伴氏

一九六六年福島県生まれ。北海道大学農学部農業経済学科卒、同大学院農学研究科博士後期課程修了。博士(農学)。酪農学園大学講師、助教授、准教授を経て、二〇〇九年四月より現職。